



につながり、それぞれの理解の仕方では学ばれたと考えられる。

本論を通して明らかになったクロイツァーの教育と弟子たちに受け継がれたものは以下のように述べることができる。

- 1 教えるべきこととして位置づけられているクロイツァーのピアノ奏法は、演奏に最も重要と考えられている直観と思索の土台となる部分であると考えられる。そして、その土台を教えることによって、クロイツァーが育てようとしたのは、表現の個性と自由性であったと思われる。これらは、土台となるものを学び、経験を積み、修練を重ねることを通して、直観を高め、思索を深めるという過程の中から自然と生まれてくるものと位置づけられている。つまり、土台となる部分を学ばなければ獲得することにできないものなのである。
- 2 弟子は、クロイツァーの演奏によって示された様々な「表現の方法」を学び取っていたと考えられる。クロイツァーが伝えたものでも、内容によっては受け継がれたものと受け継がれなかったものに分かれるが、受け継がれたものは、一人ひとりの弟子の中で消化され、それぞれの理解として受け取られた内容であったと考えられる。

そして、このようなクロイツァーのレッスンを通して、弟子は自分自身の音楽の学び方を見出したのだと言えるだろう。それは、将来に渡って音楽と関わっていく際の基盤となる部分であり、個性とも結びついていく部分である。

本論ではクロイツァーのこのような教育が果たした歴史的な意義を述べるにはいたっていない。この点については今後の検討課題とする。